

# 0～2歳児における異年齢児との関わり —模倣に焦点を当てて—

石川 洋子\*

## Interacting with Children of Different Ages from 0-2 Years: Focusing on Imitation

Hiroko ISHIKAWA

**要旨** 0歳児から5歳児の異年齢児との関わりの様相の行動分析から、とくに1歳児と2歳児において、自分より年下の者には、声をかけるなど相手を気遣った行為を見せ、自分より年上の者には、相手の持つ物や行為を見たりまねたりなど、直接的な模倣の対象としているように思われた。

そこで、異年齢児との関わりを行っている子どもたちの様相を模倣に焦点を当てて検討するため、0～2歳児の異年齢児との関わりの事例分析を行った結果、見る、遊びの意味がわかる、近づく、模倣する、模倣しながら一緒に行動する、というように関わりと内容が進むものと思われた。

また事例の分析により、模倣の相手を見つけ、先生との二者関係から離れて相手に近づき、また模倣の相手を選び、さらに相手に敬意を払いながら自己成長を図ろうとする子どもたちの姿が見て取れた。

**キーワード**：異年齢保育 模倣 0～2歳児 人間関係 発達

### I 研究目的

子どもの育ちは、身の回りにいるさまざまな人々との関わりの中で達成されていく。なかでも、子ども同士の間人間関係から得られるものは、思った以上に中身が濃く、重層的である。その厚みのある関わりの中で子どもは、模倣や学びを繰り返している。筆者は、子どもがいかにして人間関係を広げながら、模倣やごっこ遊びなどを可能としていくのか、その様相を探りたいと考え、異年齢保育の研究を続けてきた。

2016年には、異年齢保育における人間関係を発達的に分析した<sup>1)</sup>が、子どもは、相手を見たり、相手の持つ物やしていることを見る段階があり、次に模倣をするようになり、同じ動作などを通し

て相手と関わっていき、相手もそれを許したり受け入れたりするという段階があった。その後、物や遊びなどの行為を介したやりとりをしたり、物の使い方をやってみせたりしながら、模倣したり、相手の立場に立って相手に応じた行為をするようになり、言葉を使ったやりとりへと移行していった。

これらの分析の中では、たとえ0歳児クラスの子どもではあっても、相手や相手の持つ物をよく見ること、そしてあつという間に相手と関わりを持てるようになることがとくに印象的であった。

子どもの対人理解の発達について、内藤<sup>2)</sup>は、従来行われてきた「心の理論」の議論について批判的に検討し、現象学的視点に基づく相互作用説に依拠しながら、対人理解を説明している。

内藤はその中で、子どもが他者との情緒的交換

\* いしかわ ひろこ 文教大学教育学部心理教育課程

を伴う身体感覚を通じたやりとりの中で、環境世界への意味づけ、意図や目標、感情の共有が生じる（Hobson, 1993）との引用を加えながら、Traverthen<sup>3)</sup>のいう第1次相互主体性を説明した。またその後、物を介した共同注意が可能となり、物を含む文脈の意味づけを相手と協同で行う第2次相互主体性へと拡大していく（Traverthen & Hubley<sup>4)</sup>）と説明している。

内藤は、現象学的視点から“コア概念”と呼んだこれら情緒的交換を伴う相互主体的な対人理解が心の理解の核心をなすとし、子どもは、情動を伴う他者との協同的な関与や経験を通して、目的的动作の理解や意図の共有を徐々に発達させている。

子どもは養育者などとの相互主体的な関わりを核に、その後他者との関わりを広げていく。子どもの異年齢児との関わりの詳細を知ると、この関わりの変化の様相や発達を知ることにつながると思われる。とくに子どもは遊びを通して他者と関わることを考えると、人間関係が密になる模倣やごっこ遊びなどの様相を知ることが、この発達を知る鍵となると思われる。

筆者はここ数年、東京都にある区立K子ども園における異年齢保育を観察し、研究を重ね報告してきたが、年齢ごとの関わりの様相を再度分析し検討し直すことにした。

## II ビデオによる行動分析

### 1 行動分析の研究対象と研究方法

0歳児から5歳児の異年齢児との関わりの様相を探るため、2016年にビデオにより交流の場面を撮影し、分析、検討した。研究対象は、東京都にある区立K子ども園における0～5歳の子どもたちであった。

2016年には、とくに0～2歳児との関わりに焦点を当て報告したが、今回は、各年齢ごとに他年齢児との関わりを再度分析し検討した。

## 2 研究対象と分析項目

研究対象は、異年齢児と関わりのあった119例であり（表1）、分析項目は、下記14項目であった。

表1 関わった異年齢児の年齢と事例数

年齢	0	1	2	3	4	5	計
0歳		16	4	29	7	10	66
1歳			2	0	17	16	35
2歳				10	2	6	18
3歳					0	0	0
4歳						0	0
合計							119

### 分析項目

1. 相手を見る（相手を見つめるのみの行為）
2. 相手の持つ物やその行為を見る
3. 相手に近づく
4. 笑う
5. 相手に声や言葉をかける
6. 相手をまねる
7. 相手にやって見せる
8. 相手に手を伸ばす
9. 相手にふれる、なでる
10. 相手に物をわたす、もらう
11. その他の相手と関わりのある+の行為
12. その他の相手と関わりのある-の行為
13. 相手がいても関わりのない言動
14. 相手から離れる行為

## 3 行動分析の結果と考察

1) 0～2歳児の年齢ごとの他年齢児との関わり  
まず、0～2歳児クラスの子どもたちについて、他年齢児との関わりの様相を項目ごとに分析した。

### ① 0歳児の他年齢児との関わり

図1は、0歳児クラスの子どもたちの他年齢児との関わりの様相である。0歳児では、各年齢児とは以下のような行為が多く見られた。

- ・1歳児とは、相手を見る、相手の物や行為を見る、相手をまねる、相手に物をわたす・もらう、相手と関わりのある+の行為など。
- ・2歳児とは、相手に手を伸ばす、相手にふれる・なでるなど。
- ・3歳児とは、相手を見る、相手の物や行為を見る、相手と+の行為など。
- ・4歳児とは、相手の物や行為を見る、相手に物をわたす・もらう、相手と+の行為など。
- ・5歳児とは、相手の物や行為を見る、相手に近づくなど。

0歳児は、他の年齢児とさまざまな関わりをしているが、とくに年齢の近い1・2歳児とは、声や言葉をかける、まねる、ふれる・なでる、物をわたす・もらうなど、直接的な行為を多く行っていた。

#### ②1歳児の他年齢児との関わり

図2は、1歳児クラスの子どもたちの他年齢児との関わりの様相である。1歳児では、各年齢児とは以下のような行為が多く見られた。

- ・0歳児とは、相手を見る、相手に声や言葉をかけるなど。
- ・2歳児とは、相手を見る、相手の物や行為を見る、相手をまねるなど。
- ・4歳児とは、相手と+の行為、相手と-の行為など。
- ・5歳児とは、相手の物や行為を見る、笑う、相手をまねるなど。

1歳児は、自分より年齢の低い0歳児に対しては、声をかけるなどの行為が中心であるが、自分より年齢の高い者に対しては、見たり、まねたりしていた。とくに2歳児に対しては、相手の物や行為を見る、相手をまねるなど、より模倣の対象を意識した行為が見られた。

#### ③2歳児の他年齢児との関わり

図3は、2歳児クラスの子どもたちの他年齢児との関わりの様相である。2歳児では、各年齢児とは以下のような行為が多く見られた。

- ・0歳児に対しては、相手を見る、相手にふれ

る・なでるなど。

- ・1歳児とは、相手に声や言葉をかける、相手にふれるなど。
- ・3歳児とは、相手と+の行為、相手と-の行為、相手がいても関わりのない言動など。
- ・4歳児とは、相手を見る、相手の物や行為を見る、相手がいても関わりのない言動など。
- ・5歳児とは、相手をまねる、相手と+の行為など。

2歳児は、自分より年齢の低い相手には、声や言葉をかけたり触れるなどの行為をしているが、年齢の高い相手には、まねるなどの行為を行っていた。

以上のように、とくに1歳児と2歳児について見ると、自分より年下の者には、声をかけるなど相手を気遣った行為を見せており、自分より年上の者には、相手の持つ物や行為を見たりまねたりなど、直接的な模倣の対象として見ているように思われた。

当園は、0～2歳と3～5歳で分園方式をとっている。0～2歳の子どもたちは同じテラスで遊んでおり、互いに相手のクラスを知っており、相手が自分より年上であれば、自分にできないことができる相手であることも知っている。自分が模倣すべき相手であることを知って行動していると思われた。

#### 2) 3～5歳児の0～2歳児との関わり

次に3～5歳児クラスの子どもたちについて、0～2歳児との関わりの様相を分析した。図は省いたが、次のような特徴が見られた。

3歳児は、自分より年下の相手に、声や言葉をかけたり、何らかの+の行為をしていた。4歳児は、自分より年下の相手に、声や言葉をかけたり、やってみせたり、何らかの+の行為をしていた。5歳児は、低年齢児に対して、声や言葉をかけたりしていたが、相手に-の行為もしていた。

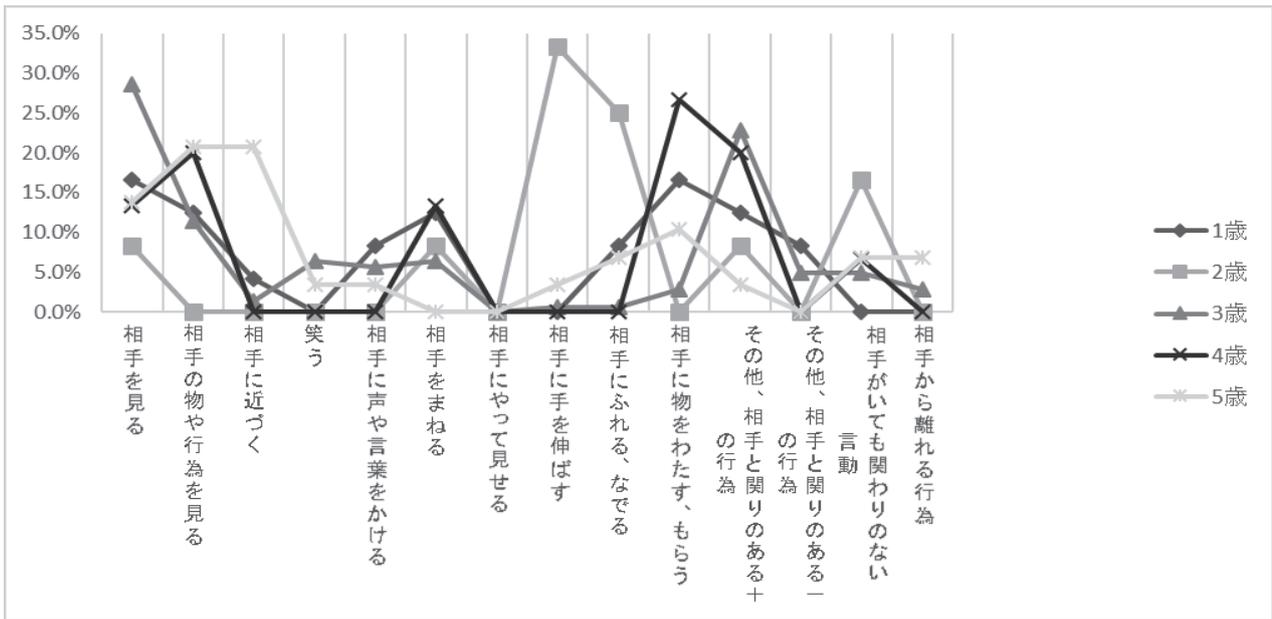


図1 0歳児と他の年齢児との関わり

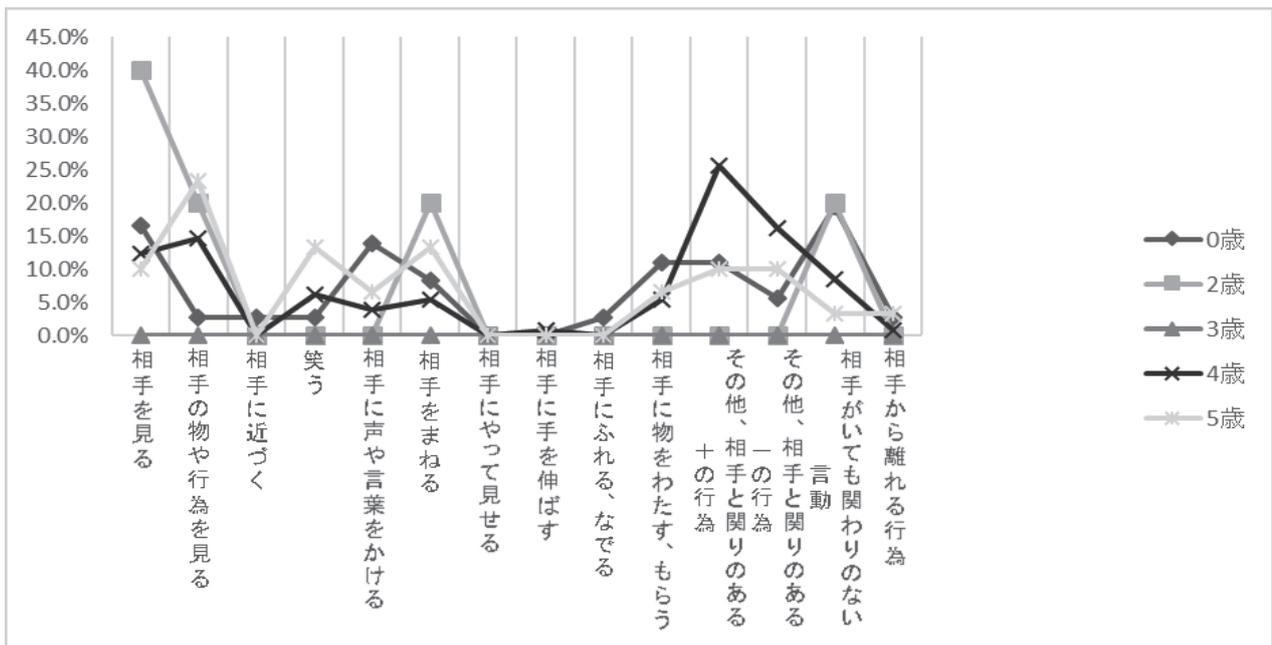


図2 1歳児と他の年齢児との関わり

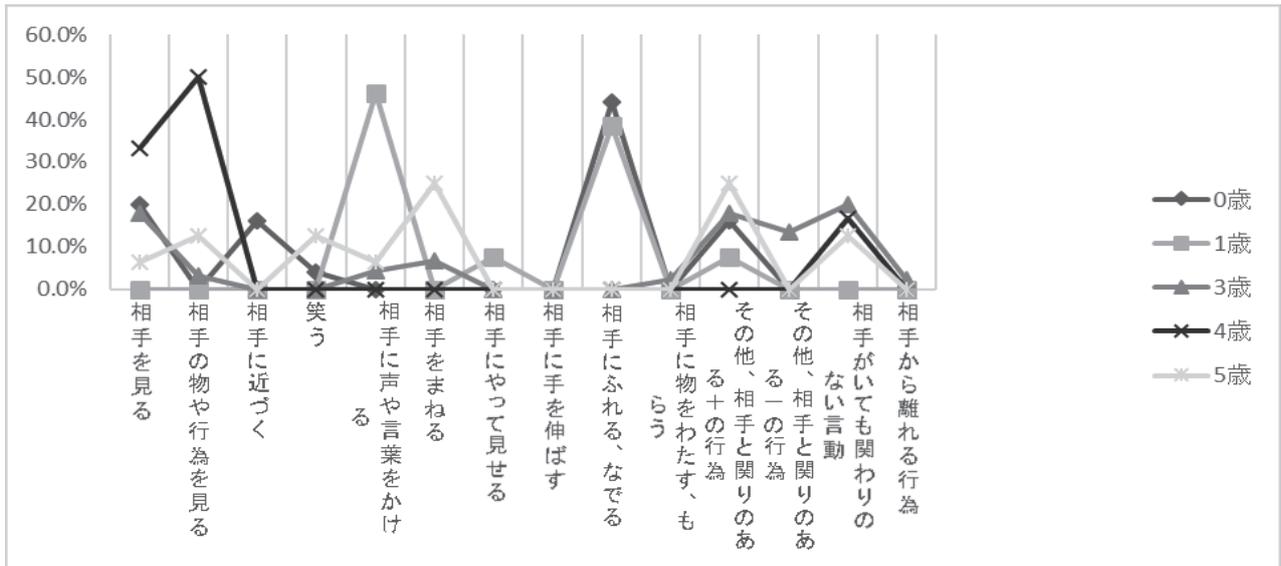


図3 2歳児と他の年齢児との関わり

以上の再検討の結果を見ると、0～2歳児の子どもたちは、自分に近い年齢の子どもに対して、よりさまざまに注目し模倣しているように思われた。そこで0～2歳児に焦点を当てビデオ撮影し、改めて模倣につながる行為の事例を分析、検討することとした。

### Ⅲ 模倣を中心とした事例分析

#### 1 事例分析の研究対象と研究方法

東京都にある区立K子ども園における0～2歳児の子どもたちの交流を観察・記録し、模倣行為を中心に分析した。観察した事例は、0～5歳児クラスの子どもたちが一緒のお店屋さんごっこの場面と、0～2歳児クラスの子どもたちのテラスにおける自由遊び時の関わり場面である。

観察は、保育における異年齢交流時にビデオによる撮影を行い、その後、録画されたものを園内で記録した。記録の際には、子どもの年齢やその場の状況などを保育者と確認をしながら行った。

調査日は、2018年3月～11月である。

#### 2 事例分析の結果と考察

0～2歳児クラスの子どもたちの関わりの中で、模倣につながる行為を分析・検討するため、

0～2歳児間に関わりがあった50例について分析を行った。事例に関わりの内容別に分けると、以下のように、相手や相手の事物や行動を見る・見つめる行為が32例、模倣する行為が11例であった。

表2 関わりの内容 (N)

見る・見つめる	32
模倣する	11
+の行為	3
-の行為	3
その他	1
合計	50

子どもの異年齢児との関わりは、上記Ⅱの行動分析で見たように、まず相手を見つめたり、相手の物や行為を見つめたりすることから始まる。そして、ビデオによる事例分析から、見る→遊びの意味がわかる→模倣する→一緒に行動するというように、その段階が進むのではないかと考えられた。以下、次の3つに分けて事例を見て行きたい。

- 見る・遊びの意味がわかる・近づく
- 模倣する

○模倣しながら一緒に行動する

○見る・遊びの意味がわかる・近づく

事例①では、0歳児が先生と一緒に1歳児のトラックを引く遊びを見て、先生にそれを伝え、1歳児の方へ近寄って行っている。このように子どもはまず、先生との情緒的な安心できる相互的な関わり、いわゆる内藤が記述した第一次相互主体性<sup>5)</sup>の段階から、先生と他児や物を共同注意し、協同でその意味付けをする第二次相互主体性へと拡大している。

その後0歳児は、先生との安定した関わりに支えられながら1歳児という他者を見、その他者が持っている物やしている遊びを見、その遊びや意味を理解していく。そしてそこに自らも参加しようと、近寄っていく。それは、先生との二者的な関わりから、第三者だった他児との直接的な関わりへと進むという変化でもある。先生の支えがあることも意識されていると思われるので、0歳児と1歳児と先生という、三者関係も続いているだろう。

事例① 0歳男児が、先生と一緒に、1歳児のボール遊びやトラック遊びを見る、指さしながら先生を見る、また指さし、先生を見る、トラックを見る、1歳児の方へ近寄っていく。(24秒)

事例②は、0～5歳児クラス合同で行われたお店屋さんごっこにおける電車ごっこの場面である。事例①と同様に、0歳児は、先生との関係に支えられながら5歳児の引くダンボール電車に乗り、先生のもとを離れ、線路の上を5歳児と2人で歩くことができている。ダンボールが電車に見立てられており、自分がそこに乗っているのだという遊びの意味も理解しているのだろう。乗客のつもりになって、電車のイメージを持ちながら、5歳児の運転する電車遊びについていくことができている。電車という箱で区切られた空間での移動は、先生との関係も少し離れたものとしている。事例①よりも、より第三者との直接的な二者関係へと変わっている。

事例② ダンボールで作った二人乗り電車に5歳男児が運転手役となり、0歳女児が先生にらせてもらい客となっている。0歳児の先生が「いってらっしゃい」と言う。0歳児は、あちらこちらを見ながら電車と一緒に乗ってついて歩く。5歳児はうしろの0歳児のようすを気にしながら、電車の線路用に作られた2本の青線の上を歩いていく。(60秒)

事例③は、1歳児Aが、自分と同年齢の1歳児Bと先生との手遊びのやりとりを見ている場面である。他児と先生との二者関係を外側から見ている場面ではあるが、他児と自分を引き写して見るということができているのかもしれない。他児の行為に対して、お辞儀をするという敬意を払っている。

自分はしていない行為、あるいは自分にはできない行為に対してお辞儀をする行為は、誰かに指示されたわけではない。遊びの意味を理解し、それが自分の模倣の対象となることを意識し、それに敬意を払っている。子どもは、相手に敬意を払いながら、模倣の対象とその行為を見つめ自らのものとしようとしているのかもしれない。

事例③ 1歳女児Aがボールを持って、他の1歳女児Bのいる花壇の方へ行く。そのBは先生と2人で手遊びをしている(女児Bが花壇の上、先生は花壇の下)。1歳児Aはその手遊びのやりとりをじっと見ている。手遊びが終わって先生がBに「上手」と言う。それを見た後、1歳児Aは両者に深いお辞儀を1回して、先生を見る。また軽いお辞儀をしてその場を離れる。(30秒)

○模倣する

上記の段階を経た子どもは、安定する核となっていた先生の存在なしで、他年齢児と直接関わりを持ち、相手や相手の持つ物を見つめ、遊びの意味を理解し、模倣を始める。

事例④は、0歳児が、1歳児の滑り台の上からスコップで砂を流す行為を模倣している。しかし0歳児に、スコップや砂があるわけではない。手で流すというしぐさだけを模倣している。砂を流すというイメージができているのであろう。模倣するということは、相手の行為を一挙にすべてを模倣するのではなく、できそうなことから少しずつ模倣していくものかもしれない。1歳年上であ

る相手の行為は、行為の意味を理解しやすく、また模倣もしやすいと思われる。

事例④ 0歳男児が滑り台の方へ行く。滑り台の反対側に1歳男児がいる。0歳児は、1歳児がスコップで滑り台の上から砂を流しているのを見ている。その後0歳児は、1歳児をまねて滑り台の上から手で砂を流すまねをする。(43秒)

事例⑤は、1歳児どうしでのジュース屋さんでの乾杯の場面である。紙コップの中に、さまざまな色の柔らかい紙からつくったジュースが入っている。事例は、ジュースが入っているつもりで、ジュースを飲むふりをする遊びである。ジュースを飲むというふり遊びの意味を理解し、さらに乾杯ごっこ遊びを一緒にできることの楽しさを味わっている。このような二人だけの直接的なやりとりや見立て遊びやふり遊びを繰り返し、模倣を繰り返す中で、イメージを深め、ごっこ遊びをより複雑にしていくのだろう。

事例⑤ 1歳男児2人でお店屋さんごっこのお店でもらったジュースを持っている。1人がコップをかちんとして乾杯。次いでもう一度2人で乾杯。その後1人が飲むまねをすると、もう1人もそれを見て、飲むまねをする。(15秒)

事例⑥も模倣行為の例であるが、0歳児は車を引く行為が難しい時に、車を引く方法を考えるのではなく、2つある車のうち、1歳児よりも2歳児の使っていたよりうまくいきそうな方の車を選ぶという行為に出ている。1歳児と2歳児の車の引き方の上手さの違いを見極めながら、自分を高めるためにはどちらの車を選べばいいのかの選択をしている。自分が模倣という行為をする場合、誰の何を模倣するのか、予想や見通しなどをもとに判断し行動している。

事例⑥ 0歳男児がひもつき車のひもを持つ。他の1歳児5人のひもつき車を引く遊びを見る。先生が0歳児のそでを短くしてやる。0歳児が先生を見る。そばで2歳児も車引き遊びをしている。0歳児が2歳児をまねて車を引っ張るが、持ち上げてしまいうまく走らせられない。0歳児は車をぶら下げて元のところへ戻り、1歳児が使っていた車の方を見たり、2歳児の車の方を

見たりして行ったり来たりして迷っていたが、2歳児が使っていた車の方を取る。もう一人0歳女児も車を引く。2人で車を引く。0歳男児も今度は上手に車を引っ張る。(137秒)

事例⑦は、1歳児5人の例であるが、そばで活動している2歳児が、自分たちより知識も技能もあり、よりよい模倣の対象であることが仲間と共有されている。そして2歳児がいなくなったとたんに、全員で2歳児がいた場に一齐に動くということができてしまっている。子どもたちの自分より上の年齢の子のようになりたいという成長欲求や意識の大きさを感ずると同時に、集団性の萌芽も見られる事例である。

事例⑦ 2歳児5人が長テーブルの上で色水遊びをしている。少し離れたところに1歳児5人がいる。2歳児が先生に呼ばれてテーブルを離れ保育室の方へ行き、テーブルがあいたとたん、1歳児5人が一齐に2歳児がいた長テーブルにかけ寄り、同じ遊びをまねし始めた。

以上の事例の分析により、子どもは先生の支えのもと、先生との二者関係を離れ、第三者をよく見、第三者の物や行為を見ながら、第三者と直接的に関わるようになることがわかった。第三者を模倣の相手として見つけ、行為の意味を理解しながら、さらに模倣するのによりよい相手を選び、相手に敬意を払いながら、模倣することを通して自己成長を図ろうとしていた。

#### ○模倣しながら一緒に行動する

子どもは模倣ができると、互いにそれを意識しながら一緒に行動するようになる。

事例⑧は、1歳児が0歳児を誘うかのようにそばに来て、さらに0歳児の要求に応じ、その指さす方向へ一緒にトラックを引いて行っている。言葉はないが、1歳児が相手の要求を理解し、それに応じることができている。1歳児でさえ、言葉がなくても相手の意図を理解し、その意図にそって遊びを共有できるということである。

事例⑧ 1歳男児がトラックを引っ張って0歳男児のところに来る。0歳児が1歳児を見る。そばで相手を互いに見る。0歳児が他を見て指さし、その方向へ1歳児と一緒に、2人でひもを引いて歩きます。(24秒)

以上のように、見る、遊びの意味がわかる、近づく、模倣する、模倣しながら一緒に行動することの繰り返しの中で、遊びの意味の理解やイメージ形成をしながら、相手との遊びの共同参加がなされていくものと思われる。子どもたちは、相手の年齢や相手のできることを見て考えながら、模倣を繰り返し、遊びの意味を共有し一緒に行動できるようになっていく。

これらの事例からは、子どもがもともと持っている模倣することへの強い志向性と、遊びの意味を察知する力、また、模倣の相手を見つけ、さらに模倣するのによりよい相手を選び、相手に敬意を払いながら、自己成長を図ろうとする子どもたちの姿が見て取れた。

そしてここでは、人間関係構築など、さまざまな学びも与えている。子どもたちにこのような模倣と学びの機会が得られる時間と空間が必要ということであろう。

私たちが子どもの保育を考える際には、これらの発達を志向している子どもの姿を見逃さぬよう環境や場を作りながら、子どもたちの関わりの様相を見つめていかなければならない。

#### IV まとめ

0歳児から5歳児の異年齢児との関わりの様相を探るため、交流の場面をビデオにより記録し、各年齢ごとに他年齢児との関わりを再度分析し直し再検討した。

その結果、とくに1歳児と2歳児について見ると、自分より年下の者には、声をかけるなど相手を気遣った行為を見せており、自分より年上の者には、相手の持つ物や行為を見たりまねたりなど、直接的な模倣の対象としているように思われた。

そこで、異年齢児との関わりを行っている0～2歳の子どもの模倣を中心とした発達の様相を検討するため、50の事例について分析を行った。そこから、見る、遊びの意味がわかる、近づく、模倣する、模倣しながら一緒に行動する、というように、関わりと内容が進むと考えられた。

- 1) 石川洋子「0～5歳児における異年齢児との人間関係の発達的变化—0～2歳児との関わりに焦点を当てて—」文教大学教育学部紀要、第50集、1-9、2016
- 2) 内藤美香「“心の理論”の社会文化的構成：現象学的枠組みによる認知科学批判の視点」発達心理学研究、第27巻、第4号、288-298、2016
- 3) Trevarthen, C. 「Communication and cooperation in early infancy」Cambridge, UK: Cambridge University Press. 321-347, 1979
- 4) Trevarthen, C., & Hubley, P. 「Secondary Intersubjectivity」London: Academic Press. 183-229 1978
- 5) 内藤美香「“心の理論”の社会文化的構成：現象学的枠組みによる認知科学批判の視点」発達心理学研究、第27巻、第4号、290、2016による